スマート農業イノベーション推進会議 第1回露地野菜・花き作プラットフォーム 会議要旨

開催日時 及び場所	日時：令和7年10月9日（木）13:00 ～ 15:00 場所：農林水産省会議室
出席者 (敬称略)	今田伸二（鹿追町農業協同組合）、大平貴之（有限会社エーアンドエス）、栗原貴史（株式会社新福青果）、 嶋﨑田鶴子（有限会社トップリバーアカデミー）、鈴木貴博（株式会社鈴生）、滝田国男（株式会社吉野家ファーム福島）
スマート農業技術の活用に関する出席者からの意見	**1　スマート農業技術に関する取組・課題** **（共通）** ・ **スマート農業技術で省力化する部分の見極め**が必要。**機械と人手の分業**を考えることが重要。一方、オペレーターの技能に依存する機械では普及しにくい。 ・ **GPS自動操舵トラクターと自動野菜移植機は労働力削減に寄与**し、**品目横断的に活用できる技術**として期待。 ・ ロボット等を活用した作業の自動化であっても**目視監視が必要であり、完全無人化できず、労働時間の削減になっていない**。規制緩和や異分野からの改善策が必要。 ・ **中山間地では大型農機を利用できない**ため製品・技術導入の考え方から異なる。特に**作業負荷の高い収穫と除草農機の小型化**が重要。 ・ **海外の既成農機を参考**にして、小型化など**日本の生産現場に適合した技術開発を推進**する観点も重要。 ・ **開発の設計段階から技術の活用主体である農業者とのすり合わせ**を行い、開発と普及を推進することが重要。 **（ドローン）** ・ ドローンによる農薬散布では、**積載量が小さいため、何度も飛行させなければならない**。また、**露地野菜でドローン散布が可能な農薬が少ない**。 ・ ブームスプレイヤーは圃場がぬかるむと使用できないが、ドローンは圃場の状態に関係なく使用できるなど、**他の技術を組み合わせて、スマート農業技術を活用することでリスク分散ができる。** **（その他）** ・ 株間除草に多くの労働時間を要する。**株間除草の自動化で費用対効果を大幅に向上**できる。海外製ロボットは高額。 ・ 育苗では**底面給水・灌漑システムが労働力削減に効果的**。病虫害の確認等の作業のみに省力化できる。

スマート農業イノベーション推進会議 第1回露地野菜・花き作プラットフォーム 会議要旨

スマート農業技術の活用に関する出席者からの意見	**2　スマート農業技術の活用に向けた生産方式や環境整備等に関する取組・課題** **（共通）** • 自動収穫機は人手に比べ収量が下がるため、**面積拡大が重要**。また、ブロッコリーでは、開花時期を統一できる品種があれば収穫効率が向上するため、**スマート農業技術に適した品種の利用**を考えていくことも重要。 **（流通・販売面における課題）** • 加工・業務用キャベツにおける自動収穫機の導入では、**鉄コンテナを活用した出荷に転換することで収穫効率を最大化**できる。この技術の普及には、**生産・出荷方法に合わせた流通面での対応**が必須。 • 海外では出荷・流通資材は実需者が提供するが、日本は生産者が準備することが多い。**流通・加工事業者等との協議を重ねて構造転換に取り組む**ことが重要。 • 加工・業務用向けへのスマート農業技術の導入は進んでいるが、生鮮向けは進んでいない。**流通・販売における規格に対する考え方を大きく変えることで生鮮向けの導入が進む**のではないか。 **（出荷・流通におけるデータ活用）** • 出荷伝票の電子化を進めているが、受注や物流段階では依然として紙伝票であり、電話・FAXのやりとりに多くの労働時間が割かれている。**サプライチェーン全体でのデータ連携・DX化**が重要。 • **データ化に取り組みトレーサビリティを実現**することで実需者・顧客のニーズを満たすことができる。**生産側データと販売側データをうまく紐づけて活用できる仕組み**が必要。 • **AIを活用し、ロボットフォークリフトが生産履歴から自動で集出荷できるようなシステム**を構築することで効率化可能。 • **共通のストレージを出荷先等と共有**し、情報のやりとりを簡単にすることで改善できる部分がある。 **3　その他** • 本プラットフォームを通じて、露地野菜・花き作における**農業現場の課題に対して理解を深めていき、関係者に気づきを与えるきっかけ**を作りたい。